

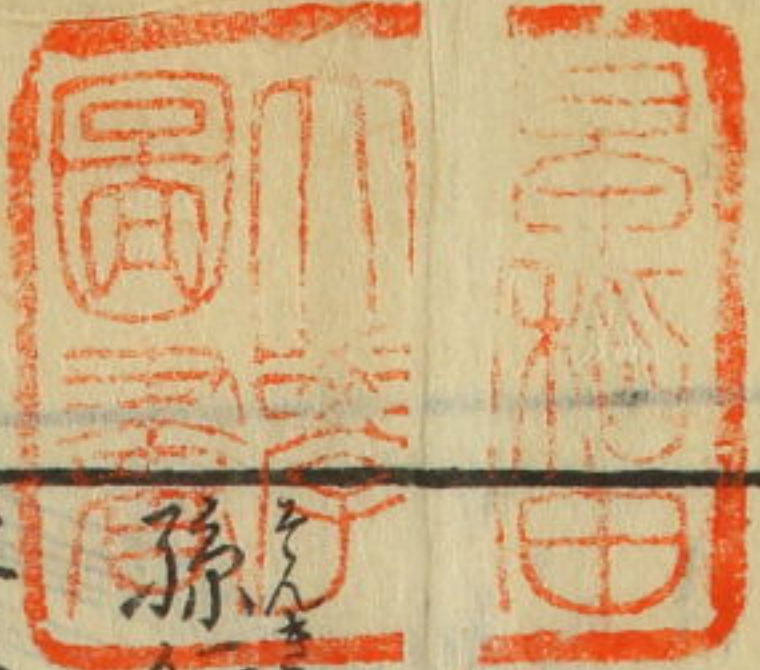


3843
卷 6

繪本西遊記初編卷之七

行者大闹黑風山

觀音收伏熊罴怪



孫行者勦斗雲に騰黑風山にあり空中より脚をひき石崖の下
 に三人の妖精居らびて物ぐる次其一人の件黒漢たの一人の道人
 右の座へたる白衣秀才たり行者雲とてりて崖の陰にかられてその
 物ぐるとの中に黒漢の曰く明日の某が母難日たり両公を請く一杯と
 酌べしとて昨夜錦襪の佛衣とぬり明日の酒宴と佛夜會と号
 公等以是を乃せやと入行者是とやや否や如意棒と打振り踊り
 出你黒漢我加夜衣と偷と佛夜會とささんやとて出して我にかえさ
 どんいけ袂袋に忍ち你が身を粉にささん三個の妖精是とやめて大はな

繪本西遊記初編七

二



秀士



黑漢

悟空

行者入山
遭三妖精

おどろき里漢の風と化して逃る行人の雲のつて走る秀士一人
跡にほれらる狐只一棒に歩殺せば白花蛇とまどたり行者はと
見く黒溪のかららぬ熊の精るべし何所は隠るこもさび出くを
袋をとりくさごんべ止りし其山中を尋るに一座の洞あり石門の
たくさば石板の上の黒風山黒風洞と書り行者徒持と揚て門の
扇を歩丈音に罵り曰く賊性早く吾が衣袋とくせと叫れば黒
溪の甲冑と着くよに一桿の黒櫻鎗と提門を用くおどろきて
行者と陰をゆく我う事十余合の黒溪敵かやくやあうん身
をかへて洞の中へ入り石門を扉たり行者も三藏の待院むんと
と思れ観音院へまゆり黒溪の加衣袋と偷と隠し置ることをくじ
物ごり後房にへく齋飯と吃ひ再び黒風山へまゆり其道うて

黒漢が属の小妖書牒匣と持て出来る行者アツより只一打
に歩殺しかの匣を用き入れの則に頭を砕死し観音院の
老僧と接待せる書帖なり行者讀終り身と變りてかの老僧
像となり洞門へ至りてかると案内されば黒漢大きなあやしと観
音院の老僧くばり速にまらさきやうは是の老猿めが化さるふく
了せりらん我をを試んと先佛衣を隠し置請て客殿に清し
とかくの對話しる如巡山の小妖りくしく馳あり大王の観音院
へまゆり使者と孫行者が歩殺し則ちの行者観音院の老僧
と像と變り洞の中へ入くと注進の黒漢すもあはれ陰を合せて突き
かれば行者も本相をあらわし狭帯と耳の中より引出しさんぶに
我ひるは天色とては晩中と勝負も分らされば我を明日と始



觀音

悟空



妖
精
被
殺
蒼
狼
露
體

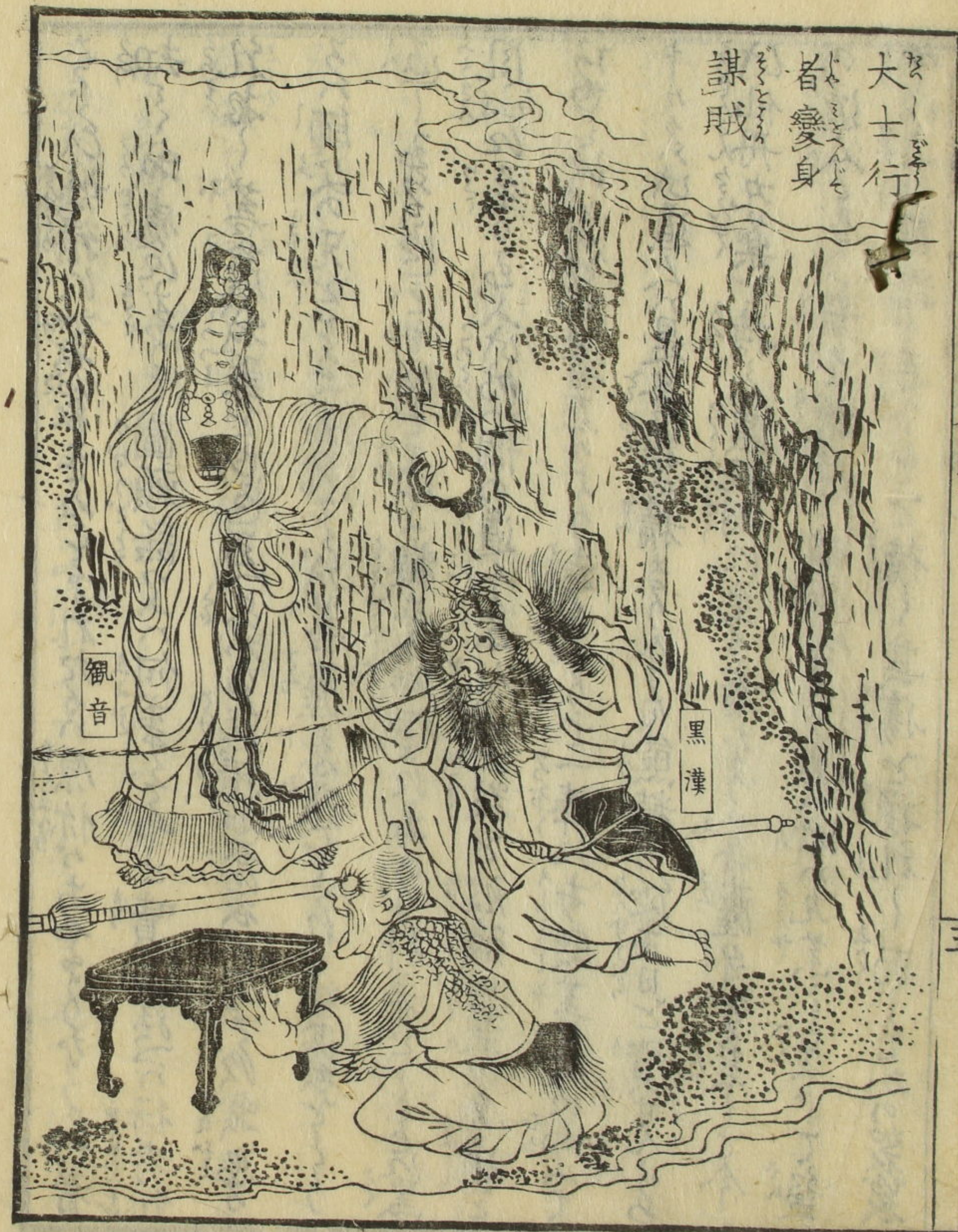
黒漢の道にゆく行者は、こくわん 観音院へまゆりぬ。早朝行者又
なつて 立出往人とて、ひきこみ 三藏引留む。曰く、えんげ 你づくへ行や行者の曰く、我
かんく け度のことより、とく 考へるに都く是観音菩薩の仕業か。ど
まね 我南海に往く菩薩に、おん 法事と同人と欲と三藏の曰く、なんかい 你南海に
りこ 至らうらまにゆらまや行者の曰く、我必ど午飯のよるまゆり
きんとうん て勅斗雲に騰がり直に紫竹林中寶蓮臺の下に至り菩薩に
ひま ひまてやうらひ你我西へ赴く其道に、ぜんざい 禪院を作りおきて人間の香
け 花を交其隣に、くまのけいり 黒熊精と住し、うれ 柴に師父の袈裟を偷せたる
まよめ 何故や今我と同一く彼所に往く袈裟とて我に返すと
ふ 云菩薩の曰く、なんち 你潑猴修りたまふれ、なんち 你師父の言まふにまごふ
と と袈裟衣と小人は借あふ又風を吹ひ火をおうりて我下院を焼

ちん ちん妖精に袈裟衣をぬとられたる原竹があやうなる行者
却 却て我處にまゐりて、ねだり 圖頼話ふへ何事とやと噴き、ま 行者忙
れ れおき菩薩我罪とせし玉、と 只かの熊精袈裟衣をかき、れ 我思ふ
る る師父の呪とてまゐりて、ふ 菩薩慈悲とされて袈裟衣とくり
返 返らざる道とゆひを、かん 観音祥雲におのり行者ととて、く 黒
風 風山に至りまゐり、せん 一個の道人も、せん 仙丹二粒と、は 破稿の盤のり、と 岨と
い いて、つ 一棒にお殺菩薩に向て
中 中なるは道人は、と 是蒼狼の精なり、い 今日熊精の誕生日と賀せん、あ あ
け け仙丹丸薬と持し、く 黒風洞に至る者なり、ふ 菩薩身と多し、と 今
の の道人とて、えん 盤を拵けて、の 彼洞に至り、れ 我の丸薬と多し、て 盤
中 中の上へ、精 熊精が舌下とて待し、其 其傷を授け、而 而してかの袈裟衣



悟空

大士行
者變身
謀賊



觀音

黑漢

とおとせられ他其ううこにううかさらば加衣の衣とて観音
 大きなお笑ひを以て道人が像にまゝとて行者の一粒の仙丹
 に化し盤の内におろび居るかの盤と両よのうげの内に入
 りて黒漢忙ぎむくすの客殿にござい座をうて後菩薩のむ
 づ小通一粒の仙丹と献して大王の壽と賀しとるうて盤と黒
 漢の前にう出るむの熊精太きたよろこび別丸茶をとりて中
 に入らるる行者もよは夜中に飛う御と延く舞躍る熊精仰
 天とる事とさなれば命とゆるせいのらと免せとさけびるるに菩薩
 勿心まら本相と取らむひ命おらむ加衣の衣と出る返とべこのむ
 べ熊精いそむ小妖を呼んで加衣の衣と出ると菩薩の御前
 さい置らるは時行者鼻の孔より花出加衣の衣と名てきり出ると熊精

怒り捨をあげて突んと後観音菩薩とて名より金箍一ツを
 とり出て黒漢が頭に戴らせ呪とまへむの熊精頭をかぐ地に
 うちあひある疼や頭痛や菩薩吾とゆるさせむと後叫く流るに
 観音則かまづ為に摩頂多戒し路の御弟子とわうて南海へ引
 領する行者菩薩に向ひ礼おし加衣の衣とさげて観音院へ入
 ったるり

観音院唐僧脱難

高老莊行者降魔

ころ往に玄奘三藏いかんさく加衣の衣とる返く衆僧いといとをきけ
 観音院とる出るむ以西に行事七月斗多に一人の後生わくしく
 きてり行く地行者をきかけ引住く問く曰くは所の地名を何と

高太公



路遇高太公
狂駕太公



三藏

悟空

高才



行者化
女
挫却妖
精

高太公

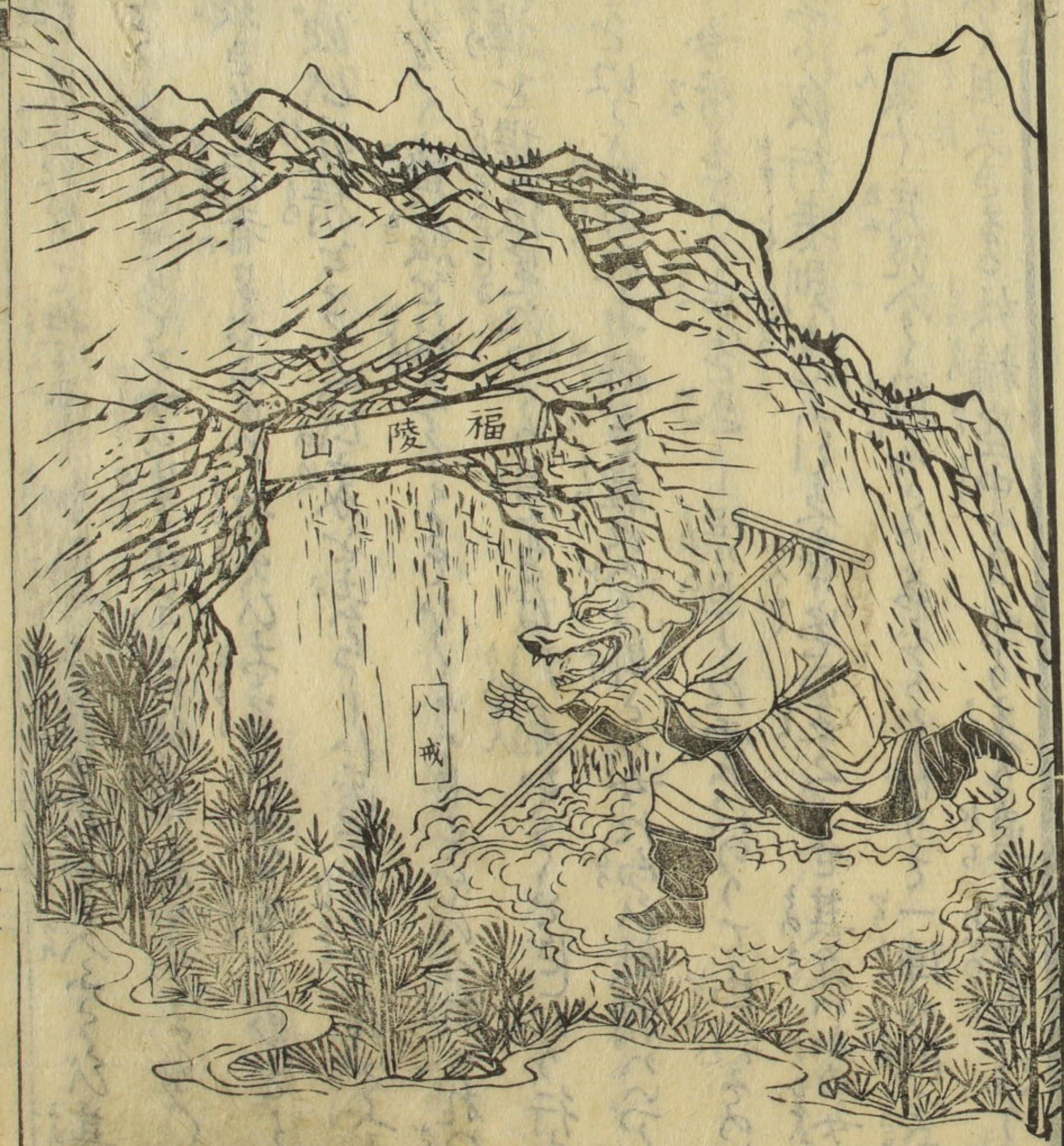
三藏

高太公

八戒

悟空

悟空追猪到福陵山



八戒

福陵山

西游记卷之十

悟空

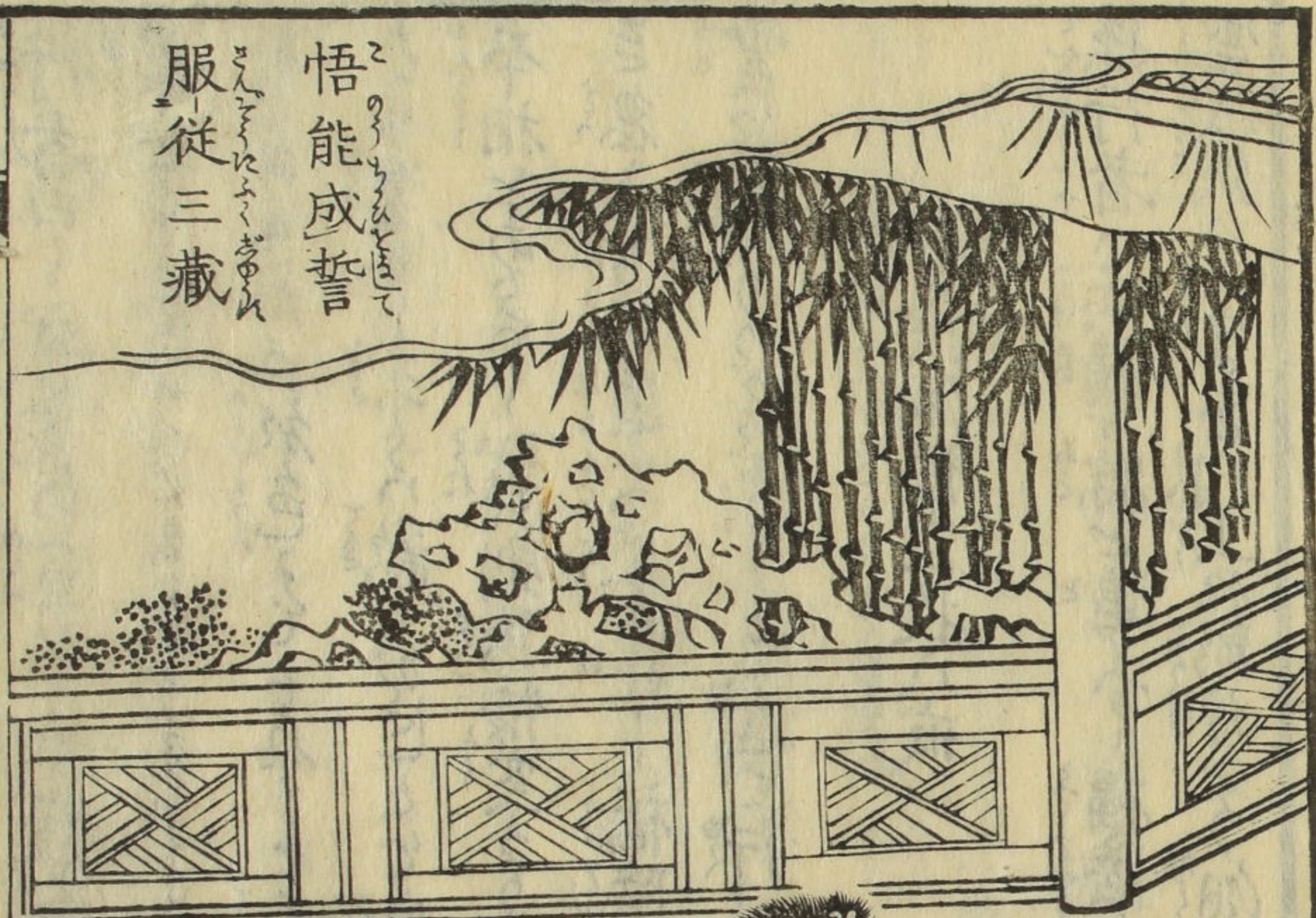


西游记卷之十

風を起し雲にのりて往来し新我女を後宅にひき入るる其面
 たより事ばせしめ女の生死とやわが我希はつとてさめごと
 こそ歎きけり行者是とぞてお笑ひたまはるるを安んじむこと
 かならばは妖精とぞとけ家と去らむむ匠をよめたり
 うきんかろく齋飯とほえくそなかりる日とぞにられれり行
 者袈裟と提後宅にのり身をば門扇かきとぞじたり行者
 袈裟を以て一おに砕き裡にけり臥る女に向ひ妖精はいづに
 けりや女房もさるる声を出し隙日とぞに雲にのりて出行そのけ
 正とさるる後行者則女と引き本宅へ立ちてせ其牙の女の
 かららに髪を房にけり臥居るる志をくけりて一陣の風吹来
 り口長く耳大きき妖精空中より降り来り直に房裏にのりて

牀の上に登らんと後行者則長き嘴とぞとく突落せば妖精
 甚ど驚き今日你何故にかくい力強きや我ゆるの過ぎとぞら
 むるよりとぞや行者の曰く我今日とぞにたまはるる事何にかま
 るるちりよう後行者は妖精の曰く你何ぞかくのぞく我を恨るぞ
 我け家の茶飯を喰へるといふも又田畠と耕し家業の事とお
 るる後あなたが衣振食用お至るまで皆我設けり本屋れり其
 あなたがなまかさいら何事ぞやと問ふ行者の曰く今日我父母外
 面にけりてのあへり我誓へり申した者よく人間のたぐひにあはれ今
 後驗者さすゆきとて逐出さるるといふも我をよめて其ごんに
 これをさるるい妖精の曰く你公を用ゆる事かうれ我系来り
 天罡変化の術あり又九齒の釘鉈と持ち何者とぞおとるべき

悟能成誓
服従三藏



悟空

八戒

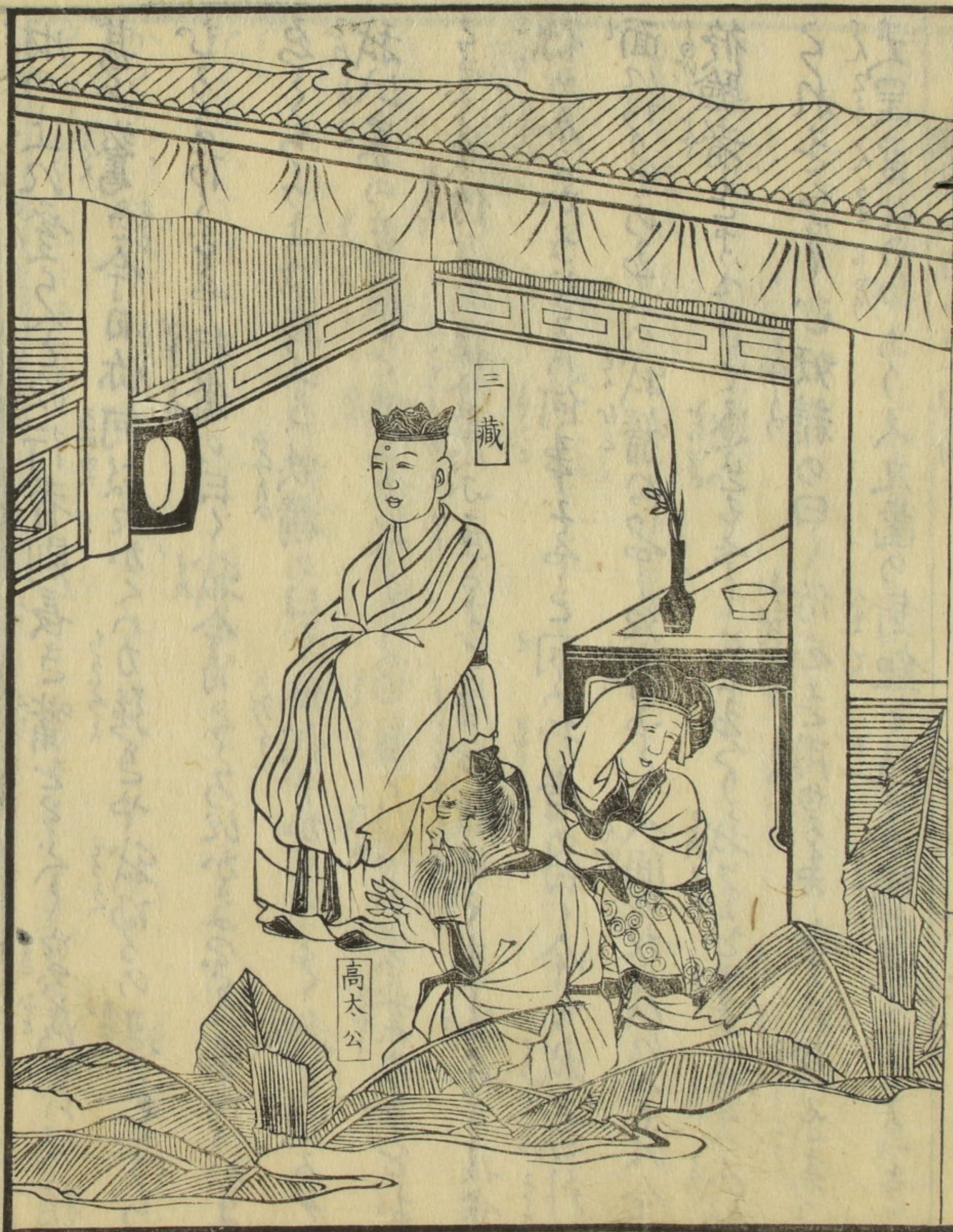


西遊記

十一

三藏

高太公



西遊記

行者曰く我多の宣ひの齊天大聖と入通力の神とすは死
君をさくくまんと云ふは是も恐れぬやと入其の妖精
おどろきたる顔色こそそれこそ天宮を崩がせ弼馬温孫悟空
かろし楽の事あり敵がじとて座をさくくせんはけは行者
本相をあらわし我の則孫悟空より妖精これとんくりておどろ
き忽まら万道火光と化し福陵山をじて逃まれば行者も又
雲に騰ぶりのがらうこそ追て行

雲棧洞悟空收八戒

浮屠山佞婁受心經

孫行者の妖精が跡と追ふ福陵山に至り又も一個の洞あり
雲棧洞の三字を門上の彫付り洞の中よりうの妖精九齒の打

鉦と提おとら出く叫び曰くそめく我を誰とらおりの其往
昔の天上に在り天蓬元師の職を任せられしが玉母瑤池の會
のめ我醉にやうせて嫦娥をとり戯に科にり下界へ逐下され
猪の猪の胎にり遂にけ山に止り名を猪鬃鬣とらふものなり你
五百年前天上を崩せし孫悟空かんのためらふにありや行者曰
我今邪心をあらため東土三藏法師を守護し西天に往て佛を
おし徑を需んとし你高き女をとり悪行をなと故に唯
一棒に赤殺さんと名をよきとありし務負を決せよ妖精はとて
忽釘鉦を捨てやうり我向に觀音菩薩の勸にり受戒持齊
一經を取らよまごの西天に往り佛をおせんは所に待て既に
久し敷い吾が行く三藏法師にやうしめよ行者が曰く你ら



鳥巢禪師

三藏逢
鳥巢受
心經



悟空

八戒

三藏

云所忍ら六偽ならん實に唐僧にまゝ西天に至らんとかゝれば
誓言ひとまゝ我に死すとて一妖精其時天より向ひ合掌し南無
阿彌陀佛と言ふ事なれば忽ち天の智と受け屍を劈て万倍
たゞんと誓言とませば行者遂に妖精と伴ひ三藏の前に礼せし
師に我罪ともし終ひ憐れを垂れり後予とは西天へゆくはれ
ゆゑとせし菩薩の教誨しむし事と委細にその言はれし三藏
大なる悦びを以て遂に師の給とほ且其名を問ふに妖精言
て菩薩我に法名を賜り猪悟能と申し三藏曰くは名は法見
孫悟空と曰ふ我は又汝に別名をあたふはとて八戒と号
せんと公け始終をせんく大によろこび青錦の加衣紗衣と鞋
一足と八戒にほく二百兩の銀と三藏に献呈と三藏はくして

これを受むるは眼を若て立出むる八戒の行李とありおひ
行者の猿捧と有りかゞげ三藏と供奉し西の方へいそぎける
初月ばうちと浮屠山とらう高山に至り鳥巢禪師に
謁し終ひは禪師と申し香檜樹上に巢を作り其中に住むる
四方に麋鹿の麝ひ花と持け猿猴の属菓と献し青鸞彩
鳳ひと啼白鶴錦鶏多く集る三藏馬より下りて礼せし
むるに禪師もまゝ本を下りて答礼し心経一卷と三藏に授け
魔障の難ならんめは経とておのぼり害と遣れぬと
ありたるに三藏謹くは経を記憶お謝して西におもむきま
禪師も金光と化して巢の中にかかれり

會入百卷己刀名冊二



虎先鋒術



虎先鋒術
奪掠三藏

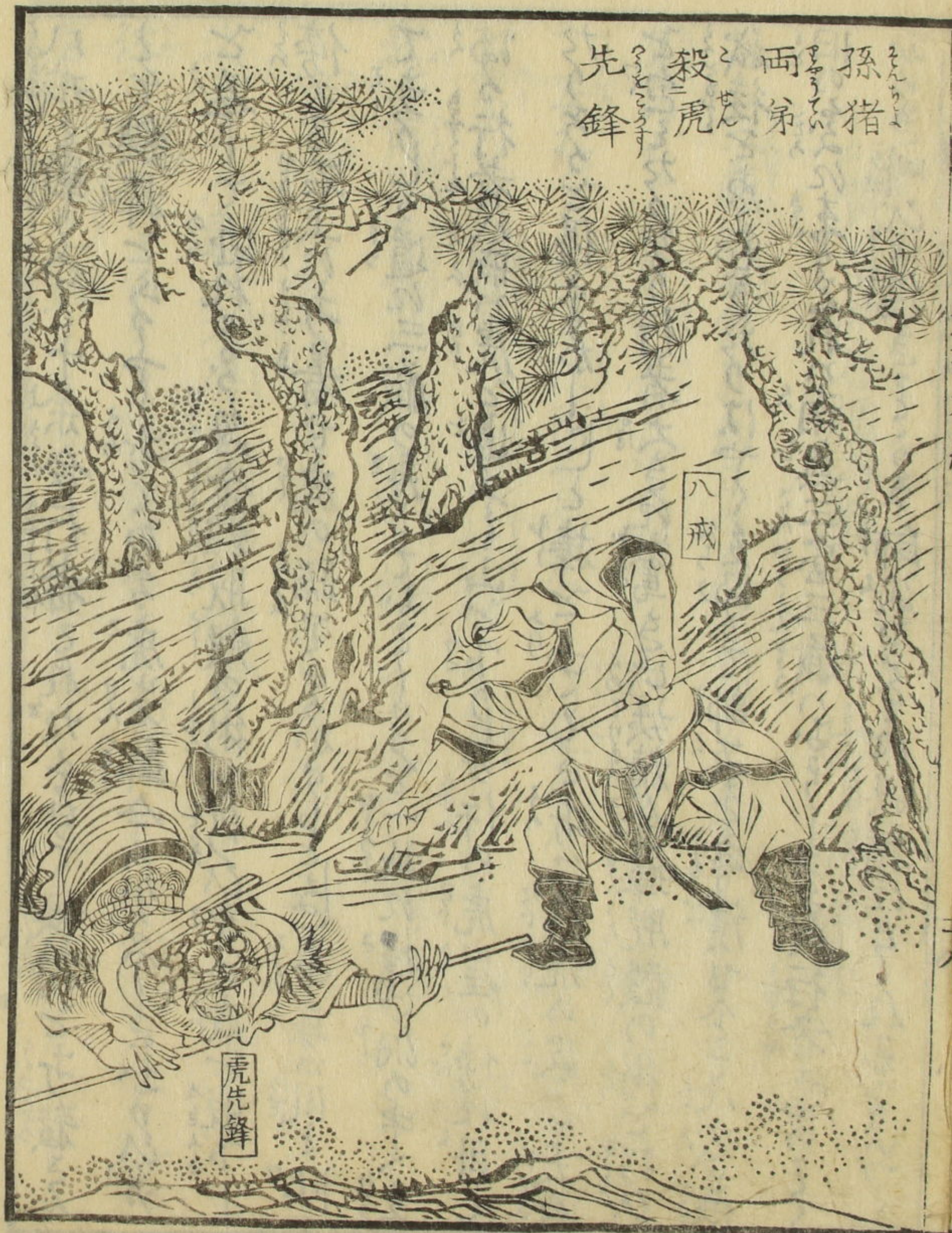
虎先鋒術

黄風嶺唐僧有難

半山中八戒爭先

おも三藏師弟の日とかさひ月を送り西方といそぎもふれもや
 復のちぞり黄風嶺とて山よさうかりもふれ山の麓より猛虎
 一足たどり出たり八戒是とて釘釘とてさうさうさうさう虎の頭
 と突んとは虎又一箇の妖精とて忽ち人のどくさう罵りて曰
 我の黄風大王の属下虎先鋒とて者さう你等凡まどく
 て案酒とてかさん八戒も又怒て曰く我後やと何ぞよのはねの凡
 まなうらん東土大唐の聖僧と供奉し西方に往く佛とておし
 経と需るものなる你道とてさう通さるとん只一葉に突殺に
 だし虎先鋒とてさうさうの叢の中より両口の刀ととり出し

八戒と戦ふと十余合行者これたどけて妖精とて殺さん
 とて鍊棒とさうさうおてかろ虎先鋒今かまへとありひ力
 と返して迎れさう忽金蟬脱殻の術とせひ身の皮と脱下し
 傍ら石上にお着せ虎の踞とさうかるとは本身の風と吐
 てまじし道に三藏の危とてさうさうと一担に提げぬの中へま
 りる行者八戒の虎と追ふ山とてりしが件の虎崖の傍に卧し
 たりちろを得さうかじと棒と上てさうおに只虎の皮とて大石
 と包むたるなり行者太さの驚きは妖精金蟬脱殻の術とせひ
 我後とあごむきたりはやくさうさう師を守護せんとして八戒と供
 旧のまにまるとれ南無三寶三藏のまじりまされ行者雷のこく
 かりき叫びは借きとてさう師父とてん妖精とてれまじりづく



やうして追行く尋ね逢て置んやと山中とかきかして尋ねるる
に山の凹なる下に大きな洞あり門上に黄風山鎮黄洞と五字と書
たり行者鎖棒と揚て門の扇を砕るまでおたき我師又とか
つせかてとぞんは洞を微塵にせんと大音に罵らうは洞の中なり
黄風大王三藏法師と云くやういは僧原大唐におあり徳さき
聖僧あり是が弟子に孫悟空と云く神通廣大の者ありとや及
ばり他が尋て来るや否やと待ては法師と吃入匠とと椿本に
三藏とから付し如に行者洞門に來つてかつせくと叫びるにさ
おびて孫悟空たつらんと虎先鋒洞門をおひらき行者に向
ふて討てかれば行者鎖棒を車にかけしんぐに戦ひしが
虎先鋒いぞう行者に敵と云き身をかへし山の小路と進行け

るに猪八戒宴に有て你を待事已ん久しと云く後らに釘
鉈と拿の只一突に虎先鋒と殺たり行者是とんく八戒と
称讚しつてび洞に入し師父の命と救人と一ひに鎖棒と
ひつてけ一ひに殺したる虎と引けり洞門とて馳行る

繪本西游記初編卷之七終

繪本西游記初編七



Handwritten text in a cursive script, likely a library stamp or inventory record, enclosed in a rectangular border. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in several lines, with some characters appearing to be numbers or specific symbols. The overall appearance is that of a historical document or a record from an old library.

Vertical text on the right edge of the page, possibly a page number or a reference mark. The characters are small and difficult to read, but they appear to be in a traditional Chinese or Japanese script.

A small vertical mark or character on the right edge of the page, possibly a page number or a reference mark.

Youthful Devotion
to Crown of Thorns.